

総称表現としての the+ 名詞単数形に関する一考察

日野上 福 枝
(関西大学大学院)

1. はじめに

英語の冠詞、特に総称表現は日本の英語学習者にとって最も理解しにくいものの一つである。本論では総称表現の中でも特に [the+ 名詞単数形] の総称表現に焦点をあて、[無冠詞+名詞複数形] の総称表現と対比することで、総称表現の *the* の意味について考えてみる。

2. [the+名詞単数形] と [無冠詞+名詞複数形] の総称表現の伝統的取り扱い方

[the+ 名詞単数形] と [無冠詞+名詞複数形] の総称表現の伝統的な取り扱い方を見てみると、無冠詞形は最も一般的に総称表現として用いられる形¹⁾とされており、*the* の形は formal で特殊な表現法²⁾とみなされている。しかし、一般的に総称表現とみなされているこれらの表現だが、そのとらえ方には文法書によって違いが存在する。

まず、[the+ 名詞単数形] は総称表現ではないとする考え方がある。これらの文法書では *the* の総称表現については一切説明されておらず、無冠詞形だけが総称表現として取り上げられている。

- (1) When we are talking about things or people in general, we do not use **the**:

Grammar in Use – Intermediate – (Murphy, E. & Smalzer, W.R., 2000, p.144)

- (2) We do not normally use *the* to talk about people or things in general. *The* does not mean ‘all’. We use *the* to talk about particular people or things.

The Good Grammar Book (Swan, M. & Walter, K., 2001, p.152)

一方、無冠詞形に関しては *almost all* を意味しているという説明が多く、本来の総称の定義となるはずの *all* とのズレが生じている。

- (3) A generalizing plural is very often used without any article: *owls cannot see well in the daytime* :

Modern English Grammar (Jespersen, 1927, p.134)

- (4) … 無冠詞の名詞複数も無冠詞の不可算名詞も、その指す対象の範囲は本来定まっていない。前後関係によってその種類全体をあらわすときに、総称的な意味になるだけである … 無冠詞・複数形による総称表現は、…限定的な意味が生じない、最も一般的な形である。それは、冠詞の意味に依存しないで、たんに名詞の表すものの広い範囲を表すからであろう。

『英語の冠詞がわかる本』(正保, 1996, pp.141-143)

- (5) [Lions are dangerous animals] の lions だと、「多くの/たいていのライオンは危険な動物である。」という意味になり、多くのライオンにあてはまる記述となります。

『謎解きの英文法 ー冠詞と名詞ー』(久野&高見, 2004, p.25)

このように、一般には総称表現と認識されている [the+ 名詞単数形] と [無冠詞+名詞複数形] だが、研究者の間でも考えのズレが存在することがわかる。つまり、総称表現の伝統的取り扱い方を見てみると、総称表現に対して様々な考えが存在し統一性のなさが伺える。本論の目的は、はたしてこれらの総称表現に対して、統一的な原理を見つけだすことはできないのか、そしてコミュニケーションの場面も想定しつつ、日本人英語学習者の観点から分かり易い説明法はないのか、詳細に考えることである。

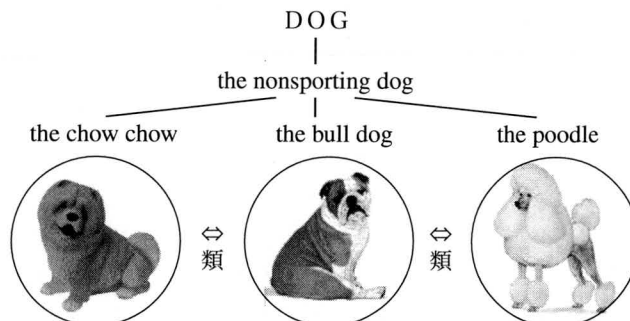
3. [the+ 名詞単数形] の総称表現におけるタテとヨコの関係

3.1. 上位概念とメンバーシップ

[the + 名詞単数形] と [無冠詞+名詞複数形] の総称表現の違いを理解するにあたって、実際の談話(Appendix 1) を例に取り上げてみる。この談話ではイヌの分類について色々述べられており、その中でまず6つのグループにイヌが分類され、そしてそれぞれのグループに属する犬種が示されている。例えば、the sporting dog group の中には、retrievers, setters, spaniels といった犬種が含まれていており、the nonsporting dog group には the bulldog, the chowchow, the poodle などが含まれている。犬種という同レベルカテゴリーを説明するときに、無冠詞形のグループと the の形のグループがあるがいったいどうしてなのだろうか。

まず the nonsporting dog group に属する犬種の「ブルドッグ」を例にとってみると、一頭としてのブルドッグが持つ特徴は、その犬種全てに当てはめることのできる特徴のようである。言い換えるならば、[図1] に描かれているブルドッグの特徴は、「ブルドッグというもの」全てに共通である。ブルドッグだけでなく、「図1」に描かれている1頭としてのチャウチャウやプードルの特徴は、その犬種全てが共通にもっているのだから、その犬種全てに当てはめることができる。そしてそのイメージの共通性から「ブルドッグというもの」「プードルというもの」「チャウチャウというもの」へと転換することができ、「個」から「類」へと抽象化できるのだと思われる。抽象化は同時に、犬種のイメージを通して、相互のコントラスト(「ブルドッグ」vs.「チャウチャウ」vs.「プードル」)引き出すのである。

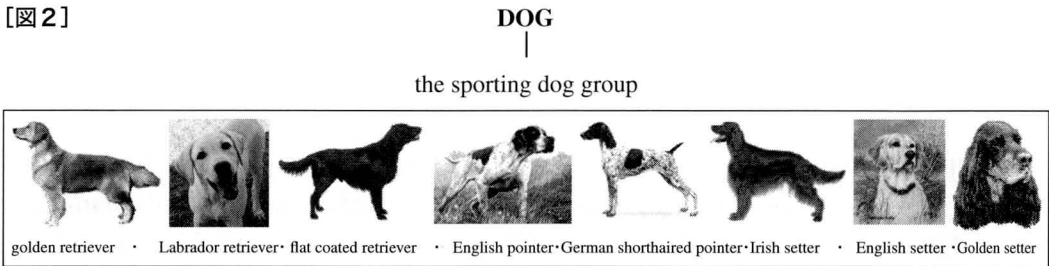
[図1]



transfer from individual to class : 抽象化 ⇒ membership-contrast features

一方、the sporting dog group の中には、pointers, retrievers, setters, spaniels が含まれているが、[図2]を見てもわかるように、それぞれの犬種の中でも更に様々な特徴を持った種類が存在する。例えばセッターの犬種には Irish setter, English setter, Golden setter が属しているが、図のようにそれぞれが明らかに違う特徴を持っている。よってセッターという犬種全てに対する共通性が希薄になるため、「セッターというもの」というイメージ化が困難になり、個体をもつ共通的な特徴をもとにその犬種全体への抽象化を図ることができない。無冠詞形で表される総称表現とは、定冠詞の場合と異なり、抽象化された代表的イメージというより、複数個体の集まりとしての数量的な大きさから総称を意味しているといえる。

[図2]

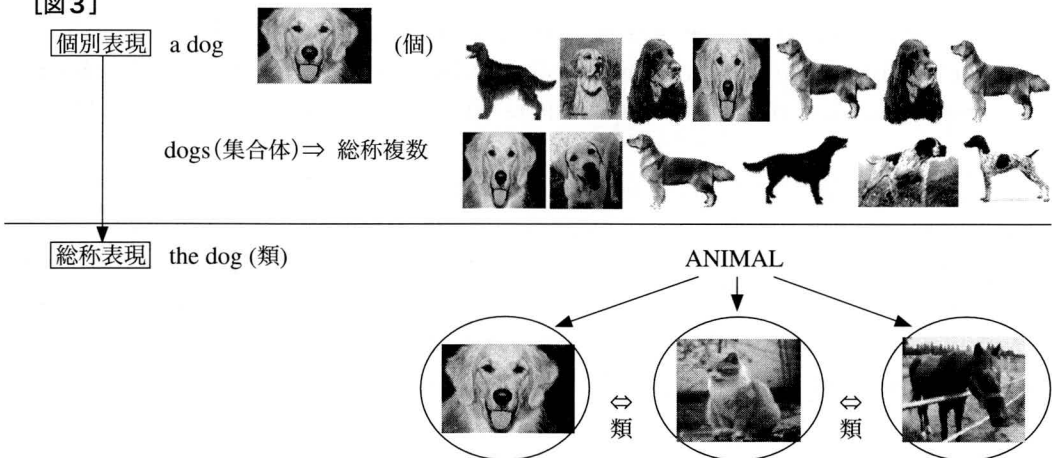


4. [the+ 名詞単数形] の総称表現の基本的原理

4.1 必要条件

[the+ 名詞単数形] と [無冠詞+名詞複数形] の総称表現について上で述べたことを、「イヌ」を例に取った [図3] を見ながら再確認してみよう。

[図3]



無冠詞形の総称表現は漠然とした羅列としての総称であり、個体としての集合体の大きさから結果として総称的に用いられる。一方、the による総称表現が可能になる状況は、織田 (1982, pp.271-274; 2002, pp.138-141) も指摘するように上位概念と横のメンバーシップが想起されうることである。例えば、「イヌ」を扱う場合、それとコントラストを構成するほかの存在 (e.g. 「ネコ」「ウマ」) を經由してそれらを括る上位概念としての「動物」が容易に想起される必要がある。その上で、一個体が持つ特徴の共通性を通して「個」から「類」

への抽象化が行われるのである。第一節の例では「ブルドッグ」vs「チャウチャウ」vs「プードル」という横のメンバーシップ対比と、それらの犬種を括る上位概としての「非猟犬」がこれに相当する。

このような原理を想定すると、従来の英文法書では formal な表現とみなされることがあるが、はたして the 自体が formality を示すマーカーと決めつけてよいのかという疑問が生じてくる。この点について、もう少し詳しく見てみよう。

4.2 *THE GRAMMR BOOK* で指摘されている *the* の総称表現と invention 性との関連性

例えば、*THE GRAMMER BOOK* (Celce-Murcia, M. & Larsen-Freeman, D., 1998) では、[the+ 名詞単数形] の総称表現は formal だとした後で、inanimate の時には invention 性のマーカーとして説明されている。しかし、なぜ invention 性なのかの説明はなく、一般化とは逆に個々の事例にとらわれすぎているという印象は否めない。

- (6) The first pattern The _<noun>__ (sg.) represents formal usage. It describes generically classes of humans, animals body organs, plants, and countable **inanimate objects that are presented as human inventions** whose origins can be traced: the gaslamp, the can opener, the laser, the computer, and so on. It is not appropriate as a generic pattern for countable inanimate objects that gradually developed over time and are not thought of as having been invented: the book, the window, the table, the chair, the bottle, and so forth(p.284)

* The book fills leisure time for many people.

....Such simple inanimate objects can, however, be used with the by anthropologists or historians who present them as a **significant invention**: for example, “The wheel represented a step forward for this culture/ mankind.”(p.296) (ボールド体は筆者による)

ここでの議論に基づけば、book, window, table などが *the* による総称表現で現れにくいのは、それぞれの上位概念が何かということイメージしながら (e.g., 「イヌ」に対する「動物」)、それでいてそれと同等のメンバーシップが何であるか (e.g., 「イヌ」に対する「ネコ」や「ウマ」) をイメージする文脈を想定しにくいためだということになる。一方、発明品が *the* による総称で記述されるのは、上位概念を想定しつつ (e.g., 「缶切り」を括る「台所用品」)、仲間 (類) のメンバー (e.g., 「缶切り」に対して「栓抜き」) をイメージし易いからである。「発明品」に限定した説明は、学習者にはミスリーディングである。

4.3 *the Grammar of Contemporary English* で指摘されている *the* の総称表現と実再生との関連性

Quirk は、*the Grammar of Contemporary English* (1972, p.148) で *the* の総称表現と実在性の関連性を指摘しているが、これは本論で展開されている *the* の総称表現に対する、上位概念と横のメンバーシップコントラストと関連付けて考えることができる。

(7) ...there may be a difference in presupposition denoted by the articles in generic use.

We may compare the following four sentences:

Dwarfs are a popular theme in literature

Hobgoblins are a popular theme in literature

The dwarf is a popular theme in literature

? The hobgoblins is a popular theme in literature

The indefinite form here seems to imply 'if they exist', while the definite form implies 'extant'.

ここでは dwarf は実在するものであるから the dwarf と言えるが、hobgoblin は実在しないものであるから、the hobgoblin とは言えないと説明されている。つまり、実在性の観点から the の総称表現が使えるかどうかが決まるのだと言う。はたして、その説明で事足りるのだろうか。

まず、dwarf についてであるが、以下のように定義される。

- (8) 1. a person of abnormally small stature owing to a pathological condition, esp. one suffering from cretinism or some other disease that produces disproportion or deformation of features and limbs.
2. an animal or plant much smaller than the average of its kind or species.
3. (in folklore) a being in the form of a small, often misshapen and ugly, man, usually having magic powers.

(*Dictionary.com* <http://dictionary.reference.com>)

辞書の定義にあるように、dwarf はもともと「人間」のイメージがあり、そこから小さな人間を連想している。例えば、Google で、dwarf のイメージ検索をすると [図4] に見られるように、ほぼどれも同じ特徴を有し、ひげの長い男性という共通のイメージが見える。先の「ブルドッグ」の例のごとく、誰もが「dwarf というもの」に対して共通のイメージを持っているようで、「個」から「類」への変換が容易にできると思われる。

[図4]



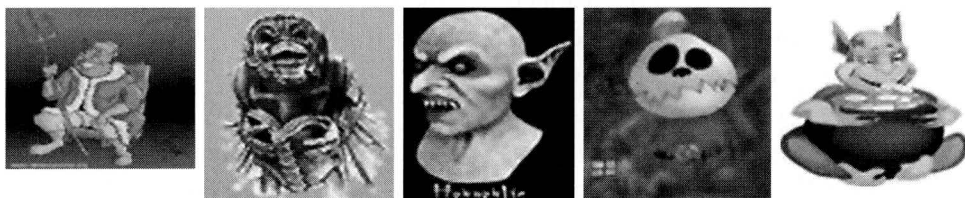
また、もともと人間をイメージしていることから、上位概念として humankind (人類) が容易に想起され、また下位概念の中には「dwarf (小人) というもの」、「man (通常の間人) というもの」、「giant (巨人) というもの」など、横のメンバーシップコントラストが存在している。このように、きっちりとタテとヨコの関係を示すことができるのである。そして、たとえそれがおとぎ話で使われていたとしても、もともとは「人間がちいさくなったもの」として、実在しているものから派生しているので、結果として、確かに Quirk が言うように実在性と関連付けることができる。

一方、hobgoblin に対する辞書の定義は、

(9) (folklore) a small grotesque supernatural creature that makes trouble for human beings
(the Free Dictionary.com. <http://www.thefreedictionary.com/hobgoblin>)

であり、この定義から何か共通のイメージ性を導き出すことは困難である。また、Google からイメージ検索を行っても「図5」を見てもわかるように、共通性が見えにくい。

[図5]



このように、実在しない hobgoblin に対して、各人が頭で思い描く hobgoblin には統一的なイメージがなく、「個」から「類」への変換を行うことが難しい。また dwarf と違って、実在しない hobgoblin に対する上位概念が一体何か、横のメンバーシップコントラストは一体何か、ということに関しても答えることはできない。つまり実在しないものに対しては、タテとヨコの関係を想定することが難しいのである。実在しないものにおいては、たとえ unicorn のようにそれ自体は共通のイメージを想定することはできたとしても、それに対する上位概念が何であるか、またそれに対する横のメンバーシップコントラストまでイメージすることはできない。タテとヨコの関係を導き出すことができないので the の総称表現を用いることはできないのである。

要するに、Quirk が論じている the の総称表現と実在性との関係の背景には、本論で展開されている [the+ 名詞単数形] とタテとヨコの関連性が潜んでいるのだと言える。今まで様々な解釈がされていた [the+ 名詞単数形] の総称表現は、すべて同一原理で説明が可能なようである。

4.4 英語母語者への聴き取り調査結果から見る [the + 名詞単数形] の総称表現

今まで述べてきた the の総称表現に対する基本原理は、実際英語母語話者に対して実施した質問の結果からも確認できる。質問は、下位概念と上位概念の関係を交えて行った。Dog, car, comic, cold のような下位概念はそれぞれの上位概念である animal, vehicle, book, disease が簡単に意識にのぼる概念である。ところが、例えば vehicle に対する上位概念は何かと言うことを想定した時、それ以上の上位概念を想定しにくい概念として区別しているようである。結果は [表1] となった。

[表1] 上記の結果を基本レベルと上位レベルに分類した結果

Y--- Yes, N--- No, D--- Depends³⁾

<< いわゆる「下位概念」に属するもの >>	<< いわゆる「上位概念」に属するもの >>
1. The dog is loyal to human beings. 可 4 (Y---2 + D---2) : 不可 1 (N---1)	2. The animal needs water to live. 可 2 (Y---2) : 不可 3 (N---3)
3. The car is convenient. 可 5 (Y---3 + D---2) : 不可 0 (N---0)	4. The vehicle makes human life more convenient. 可 3 (Y---2 + D---1) : 不可 2 (N---2)
5. The comic is a genre that children like. 可 4 (Y---4) : 不可 1 (N---1)	6. The book is communicative. 可 3 (Y---2 + D---1) : 不可 2 (N---2)
7. The cold is serious. 可 3 (Y---2 + D---1) : 不可 1 (N---1 (?---1))	8. The disease makes people sick. 可 1 (Y---1) : 不可 4 (N---4)
9. The mother gives birth to the child. 可 5 (Y---3 + D---2) : 不可 0 (N---0)	

結果を見てみると、ばらつきはあるものの、全体としてはいわゆる「下位概念」的な語における *the* による総称表現の認可度の高さが窺える。Dog や car に関しては、まず上位概念である animal, vehicle が簡単に想定できて、そして横のメンバーシップコントラストである dog – cat – horse や car – bus – train が簡単に予想でき、更に「車というもの」「犬というもの」と共通のイメージを簡単に導きだせ、「個」から「類」へ変換できるという判断を反映しているのだと思われる。

一方、「車」や「イヌ」の上位概念といえる vehicle や animal になると、それ以上の上位概念を想定しにくく、また横のメンバーシップの対比を導き出しにくいので、*the* の総称表現を使えないと判断するのだと考えられる。更に vehicle や animal に対して共通のイメージを想起しにくいことも一因といえる。例えば animal には human beings, fish, bird など、また vehicle には airplane, ship, car, train, ox-cart など、様々なものが含まれており、そこから簡単に「生き物というもの」や「乗り物というもの」に対する共通のイメージを導きだすことはできないのである。以上の調査からも、*the* の総称表現に対するタテとヨコの関連性と、「個」から「類」への抽象化との関連性を裏付けることができたと考える。⁴⁾

5. 抽象化のマーカースとしての *the*

5.1 [the + 名詞単数形] の総称表現とメトニミー

the の総称表現の基になっている「個」から「類」への変換は、言い換えると「具体」から「抽象性」への変換である。そのように考えると、総称表現のみならず [the+ 名詞単数形] を用いたメトニミーの表現にも原理を拡大することができそうである。例文 (10)~(12) はメトニミーの表現である。

(10) Among the seven states served by the Colorado River, California has become the cuckoo in the nest, its cities expanding, their thirst apparently unquenchable.

(Time, July 29, 1991 cited by 井上, 1993, p.176)

(もともとは鳥としてのカッコウであり、カッコウの「他の鳥の巣に卵を産」特徴から連想される意味を拡張し、「侵入者」を表す。)

(11) Climbing the social escalator. (『プログレッシブ英和中辞典』, 1997, p.631)

(escalator は「上って上階へ行く装置」であり *the social escalator* が「社会の上階へ上ってゆく」ことから「出世すること」を連想させる。)

(12) She pushed the burglar to one side of her mind (Barnden, 2007)

(burglar はもともと「強盗」を意味するが、そこから「人の心に立ち入って秘密などをこっそり知りたいという欲求」を連想させる。)

例えば (10) で、a cuckoo と不定冠詞を用いた場合あれば生き物としてのカッコウに過ぎず、そこから概念化へと発展させることはできない。結果、全く意味不明の文章になってしまう。このようにメトニミーにおいて、目に見える具象を抽象化しそしてそこから連想できる隣接のものを導き出し意味の拡張をすることは、まさに [the+ 名詞単数形] の総称表現で行われている「個」から「類」への抽象化と同じプロセスを経ていると思われる。

つまり、*the* を「抽象化のマーカ―」として特徴付けることができるのである。今までメトニミーと総称表現とを別々に分けて考えがちであったが、実は *the* が意味する「具体」から「抽象」への変換は、両者に共通する要素であるという議論も成り立つ可能性を秘めている。

6. 学校教育での総称表現の効果的な指導

これまでの議論を踏まえて、まず大事なことは、*the* の総称表現を教える必要性を避けないということである。当たり前のことだと思われるだろうが、既に本論で指摘したように近年発行された *Grammar in Use – Intermediate –* (Murphy & Smalzer, 2000, p.144) や *The Good Grammar Book* には *the* の総称表現に関する説明がない。確かに *the* の総称表現は限られたジャンルで用いられることが多く、学生達に最も親しみのある教科書というジャンルでは頻出するものではない。しかし *The Good Grammar Book* (Swan, M. & Walter, K., 2001) のように *the* を用いた総称表現が通常使われないと説明し、一切排除してしまうことに疑問を感じる。上位概念（縦の関係）を同定しつつ、メンバーシップ（横の関係）を区別する必要性の高い、工学、医学、生物学、植物学など特定の学問分野にいる学習者にとっては、[*the*+ 名詞単数形] が通常よく目にする総称表現法になることは十分考えられる。それを理解することは大事である。またそれ以外の分野においても現実に存在する *the* の総称表現を避けることは、結果として学生達の総称表現に対する理解度を妨げることにしか思われぬ。

第二に、冠詞を教えるにはテキストレベルで教えたほうが効果的であることは分かっているが、実際には文法書や教科書の中で冠詞についての例文は、文レベルでしか記載されていない。

(13) <定冠詞+単数普通名詞>の形の総称用法

「～というもの」という意味で、他の種族との対象を意識してその種族全体をひとまとめにして表す。総称単数と呼ばれることは a [an] と同じであるがやや形式ばった学問的な記述などに用いられる。

The horse is a useful animal. (馬は役に立つ動物だ)

The bat judges distances by a kind of echo-location. (コウモリは一種の音響レーダーで距離を判断する。)

『徹底ロイヤル英文法』(1988, p.136)

(14) [*the*+ 単数普通名詞] となる場合。

「～というもの」という意味で種類全体を表す。この場合の用法を代表単数 (Representative Singular) という。

The whale is a large mammal. (クジラは大きなほ乳動物である)

Edison invented the gramophone. (エジソンは蓄音機を発明した)

『総解英文法』(1991, p.214)

このような短い説明と例文だけでは、縦と横の関係に基づく *the* の総称表現を理解することはできない。しかも、重要なのは、日本語ではまず意識にのぼることのない上位概念の存在と、そこに含まれるメンバー間の対比が *the* による総称表現を成立させる決め手になっているという点である。センテンス・レベルを超えた説明と、概念化プロセスの違い

に学習者の意識を向けることが肝要である。

脱センテンス・レベルによる説明は、談話とそのジャンルに基づく分析へと関心が向かうべきことを示唆する。定冠詞による総称表現が formal な文体として説明される背景には、上位概念とメンバーシップが意識にのぼりやすい状況が潜んでいる。たとえば、動物の種類を説明したり、人間が産み出した道具や機器を説明する百科全書（あるいは科学系の文章）のようなジャンルでは、書き手も読み手も初めから縦と横の存在を暗黙の了解事項として、その談話産出・理解に関与しているのである。The による総称表現が、話し言葉に現れにくく、書き言葉で遭遇しやすいのは、そのためであって、話し手（書き手）が formal を装うために選んでいるわけではないことを学習者に知らしめることがまず先決である。

注

- 1) トムソン, AJ. & マーティネット, AV, 1988, p.8: *Collins COBUILD English Grammar*, 1990, p.45.
- 2) 宮川幸久, 綿貫陽, 須貝猛敏, 高松直弘, 1988, p.136: *Collins COBUILD English Grammar*, 1990, p.45; Celce-Murcia, M. & Larsen-Freeman, D., 1998, p.296.
- 3) depend on と解答した人たちのコメントは、コンテクストによって the の総称表現が可能であると言う理由であったので yes 側に含めた。理由としては、例えば dog, car, cold, mother においては scientific やドキュメンタリー番組であれば [the+ 名詞単数形] を総称として使うことができるとされていた。
- 4) 興味深かったのは、参加者の一人が animal, vehicle, book のときに the の総称表現法を用いることに違和感があるというコメントである。the の総称表現を用いる時には、それより大きなグループを想定して用いるから dog のときのほうが animal のときよりも the の総称表現としてより適しているとの指摘であった。同様に、9. “The mother gives birth to the child” においても、“Of parents the mother gives birth to the child” にしたほうがよいと指摘しており、このことは the の総称表現とそれを包括する上位概念との関連性を示唆していると思われる。これらの関連性については、この質問調査以前に別の英語母語者 5 人へ “Of all the immoral things, the lie is a sin.” は総称表現として可能かという質問に対して全員が不可としていたことから窺える。the lie を総称表現として認められない理由は聞かなかったが、おそらくそれを包括する上位概念が存在しないので、the lie を総称表現として用いることを不可としたのではないかと思われる。個人的な考えからすると、the lie の上位概念は「悪いこと (bad things)」ではないかと思ってしまうが、直接の上位概念として bad things を想定すれば white lie などが存在し、the lie は必ずしも悪いことではないという矛盾が生じてくる。よって直接的な上位概念が見つかりにくいという点から、the lie が総称表現として用いられないのではないかと推測する。結果として、the の総称表現を用いるには、上位概念が必要であるということを示唆していると思われる。また、今まで論じてきた the の総称表現のタテとヨコの関係性と、「個」から「類」への抽象化の議論と合致しているといえる。

参考文献

- Barnden, J. (2007). *ATT-Meta Project Databank: Examples of Usage of Metaphors of Mind*.
<http://www.cs.bham.ac.uk/~jab/ATT-Meta/Databank/index.html>
- Celce-Murcia, M. & Larsen-Freeman, D. (1998). *The Grammar Book* (2nd ed.). Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- Collins COBUILD English Grammar*. (1990). Birmingham: HarperCollins Publishers.
- Colombia Encyclopedia*. <http://colombia.thefreedictionary.com/dictionary>.
- Freedictionary.com* <http://dictionary.reference.com/>
- 久野暉・高見健一『謎解きの英文法－冠詞と名詞－』東京：くろしお出版.
- 井上貞明(1993)「現代英語の比喩的表現」『経営情報科学』6(2): 167-194.
- Jespersen, O. (1927). *A Modern English Grammar*. Heidelberg: CARLWINTER'S UNIVERSITÄTSBUC HHANDLUNG.
- 小西友七・安井稔・國廣哲彌・樋口信也(1997)『プログレッシブ英和中辞典』(第二版) 小学館.

宮川幸久・綿貫陽・須貝猛敏・高松直弘 (1988) 『徹底例解 ロイヤル英文法』 東京：旺文社。

Murphy, R. & Smalser, W.R. (2000). *Grammar in Use — Intermediate —*. Cambridge: Cambridge University Press.

織田稔 (1982) 『存在の形態と確認 — 英語冠詞の研究 —』 東京：風間書房。

織田稔 (2002) 『英語冠詞の世界 — 英語の「もの」の見方と示し方 —』 東京：研究社。

Quirk, R. (1972). *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman Group Limited.

正保富三 (1996) 『英語の冠詞がわかる本』 東京：研究社。

Swan, M. & Walter, K. (2001). *The Good Grammar Book*. Oxford: Oxford University Press.

高梨健吉 (1991) 『総解英文法』 東京：美誠社。

The Free Dictionary.com <http://www.thefreedictionary.com/>

トムソン AJ & マーティネット AV (1996) 『第 4 版 実例英文法 A Practical English Grammar』 東京：オックスフォード大学出版局。

Appendix

Appendix 1

Classification of Breeds

Attempts to classify dogs probably date from the time when humans discovered that certain canine traits were more useful than others. The earliest known system of classification, that of the Romans, included categories for house dogs, shepherd dogs, sporting dogs, war dogs, dogs that ran by scent, and dogs that ran by sight. Today there are systems of classification and breeding in most countries of Western Europe and in North America, many using a variation of the standard British system.

In the United States, the classification system most frequently encountered is that employed by the American Kennel Club (AKC), which recognizes more than 150 of the more than 200 known breeds. The breeds are grouped into six classes. In the sporting dog group are pointers, retrievers, setters, and spaniels. These dogs hunt by air scent as opposed to those of the hound group, e.g., beagles, foxhounds, and bloodhounds, which track their prey by ground scent. Also classified as hounds are those dogs of the greyhound type, e.g., whippets, borzois, and Salukis, which hunt mainly by sight. The many breeds of terrier go to earth after their burrowing prey. Among the working dog group, used as guards, guides, and herders, are the collie, the German shepherd, and the St. Bernard. Such diminutive pet dogs as the Pekingese, the Pomeranian, and the pug belong to the toy dog class. The nonsporting dog group is a class of dogs bred principally as pets and companions and includes the Boston terrier, the bulldog, the chow chow, the Dalmatian, and the poodle. (Colombia Encyclopedia)